No. 1501271
〔建築編 Part 7〕

あるじでえ

No.26

世田谷区教育委員会　民家園係
〒157-0067　世田谷区喜多見 5-27-14
◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03(3417)8492
◎ 岡本公園民家園
☎ 03(3709)6959

平成7年1月1日　発行
平成13年5月　増刷
平成15年10月　増刷

世田谷の民家　―その2―

屋敷への入口

　農家の屋敷は、周囲に巡らした屋敷林や生垣、塀などによって、外部との境としています。このうち、屋敷林については前回も述べたように、欅（けやき）や杉、松といった高木（こうぼく）が防風や防塵（ぼうじん）のためばかりではなく家屋の建築材料を確保するために、また、桐や桜などは家具材、柿や梅などは食用（出荷用）にと、自給自足のために欠かせぬ樹木が多く植えられていました。また、生垣には、樫（かし）や柊（ひいらぎ）、珊瑚樹（さんごじゅ）、柾（まさき）などの常緑樹を使うことが多く、竹垣【写真1】や柴垣【写真2】などの垣にした家も見られました。塀については、一般の農家ではほとんど見られませんが、名主などの役職に付いた家では、板塀【写真3】で一部を囲ったところもあったようです。そして、こうして巡らせた屋敷林や生垣の合間に、屋敷へ

写真1　永峯家竹垣［喜多見］

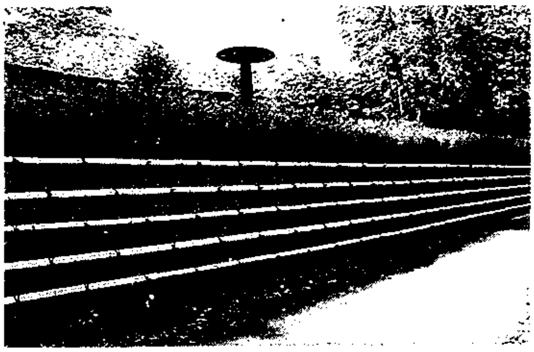

写真2　柴垣（次大夫堀公園民家園内）

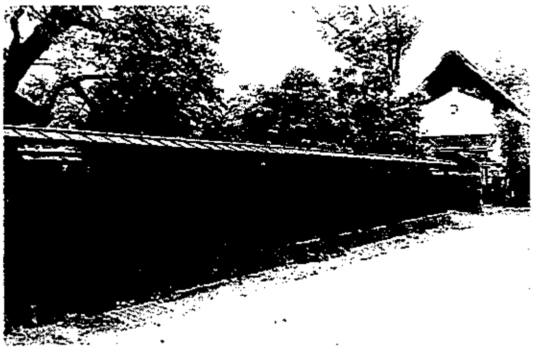

写真3　板塀（次大夫堀公園民家園内）

写真4　粕谷家常口［中町］

写真５　斎藤家背戸口［喜多見］

写真６　三田家長屋門［深沢］

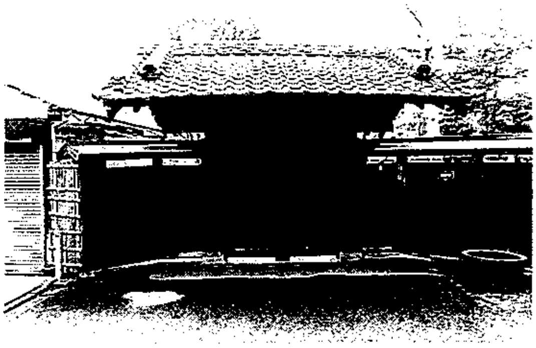

写真７　福田家薬医門［祖師谷］

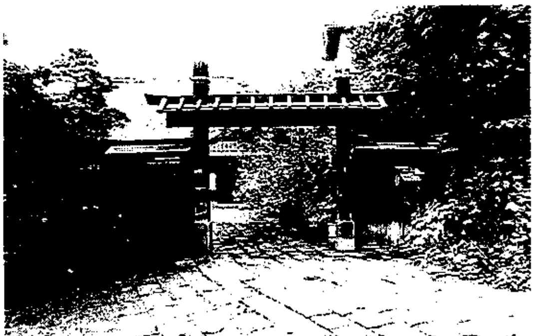

写真８　秋山家冠木門［深沢］

の入口が開かれていました。

世田谷辺りでは、こうした屋敷への入口（表側）を普通ジョウグチ（常口）と呼んでいます【写真４】。これに対して、屋敷の裏手にある出入口をセド（背戸）またはセドグチ（背戸口）と称しています【写真５】。かつてはこうしたジョウグチやセドグチには、特に門を構えるというようなことはなく、周囲に配した生垣の途切れたところから、あるいはうっそうと茂った屋敷林の切れ間から屋敷内へと入れるような、ひっそりとしたたたずまいになっているのが普通でした。

ただし、名主や旧家といったある限られた階層の家だけは、身分制度の厳しかった江戸時代にも特に門を構えることが許され、世田谷辺りでも長屋門[1]【写真６】や薬医門[2]【写真７】、冠木門[3]（かぶきもん）【写真８】を持つ家が見られます。一般に門は、社会的地位（格式）の象徴で、その門形式によって格付けされていることが多く、こうした門も、元来は武家や公家などの屋敷に見られた門形式を踏襲したものでした。

また、一般の農家においても、ジョウグチの両脇に、欅や椋（むく）などの巨木を植えて門代わりとしたり、魔除けの意味で柊を一対植えてある家も見られました。

主屋の向き

世田谷の場合、ジョウグチを入ると屋敷内は農作業の場であるニワを中心として、主屋や付属屋が配されている場合が多いようです。そして、その配され方は千差万別で、１つとして同じものはありませんが、広い視野から見て行くと、いろいろな共通点が見えてきます。

ニワに面して建つ主屋は、日照の点から南向きに建てられることが多いわけですが、これらは全て真南を向いて建っているとは限らず、むしろ南東あるいは南西の方へずらして建てられている主屋が全体の６

1）長屋門は、元来武家屋敷に見られた門形式の一つで、家臣の居所としての長屋と門とが結合したものでしたが、名主階層でもお上に貢献した家に特別に許されたものです。扉脇の部屋は、一方が年貢米を預かる収納に使用され、もう一方は土間で納屋や農具小屋、あるいは下男部屋として用いていましたが、土牢などを設けることもありました。

割以上を占めています。また、同じ世田谷の地にあっても、地域によってはっきりとその特徴が現れているのです。それでは、地域別に主屋の建てられている向きについて見てみましょう。

内陸部に位置する烏山・八幡山・給田などの区北西部では、南東から南南東に向けて建つ主屋が6割以上を占めています。また、区北東部の北沢・松原・桜上水は、報告例が5件と少ないので確かなことはいえませんが、5件ともほぼ東向きに建てられていました。深沢・中町・等々力・奥沢といった多摩川に近い区南東部では、7割が南から南南西に向けて建てられていて、南東から東寄りに向く主屋はほとんど見られません。また、これらとは少し立地条件の異なる多摩川流域沿いに開けた喜多見・宇奈根などの区南西部では、東から南東方向あるいは俗に『富士南』と呼ばれる南南西から南西方向に建てられていて、南から南南東に向けて建てられている主屋は全く見られないのです。

つまり、内陸部にあたる地域ほど主屋は南から東寄りに向き、また、多摩川に近い地域ほど南から西寄りに向けて建てられていることがわかります。そして、これらを主屋の建てられた建築年代ごとに比較しても、大きな違いはないといえるのです。

それではこうした地域による違いは何を意味するのでしょうか。残念ながら明確な答えはありませんが、1つには先に屋敷林や高生垣のところで述べたように、風に対する配慮があったようです。

家の向きが風を防ぐ手段であるとすれば、それぞれの地域で最も風が強く吹く方向に建物を向けない配慮は当然あったと考えられます。とするなら、多摩川沿いの地域では南東あるいは北西の風が、内陸部では南西から南寄りあるいは北東から北寄りの風が強かったと推測でき、いずれも屋敷林や高生垣を巡らせた位置と符合してくるのです。事実、多摩川流域沿いの地域では、春から秋にかけて東京湾から多摩川に沿って吹き上げて来る巽（南東）の風が強く、秋から冬にかけては北西の風が強かったといいます。こうしたことからも、主屋の向きと風の吹く方向には深いかかわりがあったと考えることができるのです。

これと同様に、付属屋についても風を防ぐような配置が取られていたと考えることができるでしょう。土蔵・物置・納屋などの建物は、農作業を行う上で必要な施設ですから、そのためにニワを中心にしてそれらを配することはより機能的であり、多くの農家ではそのような配置形式を取っています。それとともに、主屋やニワに直接風が吹き込まないような配置をする配慮もなされていたと思われ、これらの付属屋は主屋から見て南方に建てられている場合が多いのです。特に、堅固に建てられた土蔵などは、主屋の風上に建てている家がいくつも見られました。

地相と家相

こうした風向き以外で、農家の屋敷構え（屋敷配置）を決めるのに重要視されていたのが地相や家相でした。これらは、古来中国より伝わった風水説（陰陽五行説）に基づくもので、建物の位置や方向、構造などをみてその吉凶を判断する手段です。

当時は貴族社会の間で次第に広まっていきますが、一般の庶民にまで普及するのは江戸時代も中期以降になってからのことでした。世田谷の農家でも、このころになると家相図【写真9】が描かれてその吉凶が判断されていることから、庶民の間でも広まっていたことがわかります。

この地相や家相では、特に鬼門（北東）や裏鬼門（南西）の方角を忌むことが多く、例えば、屋敷のジョウグチをこの方角

2）薬医門は、元来医者の家に建てられた門で、本柱の後方に控柱を建てその上に女梁・男梁を架けて屋根を載せたものです。
3）冠木門は、門柱に横木の冠木を渡した略式の門で、屋根を載せるものと載せないものがあります。

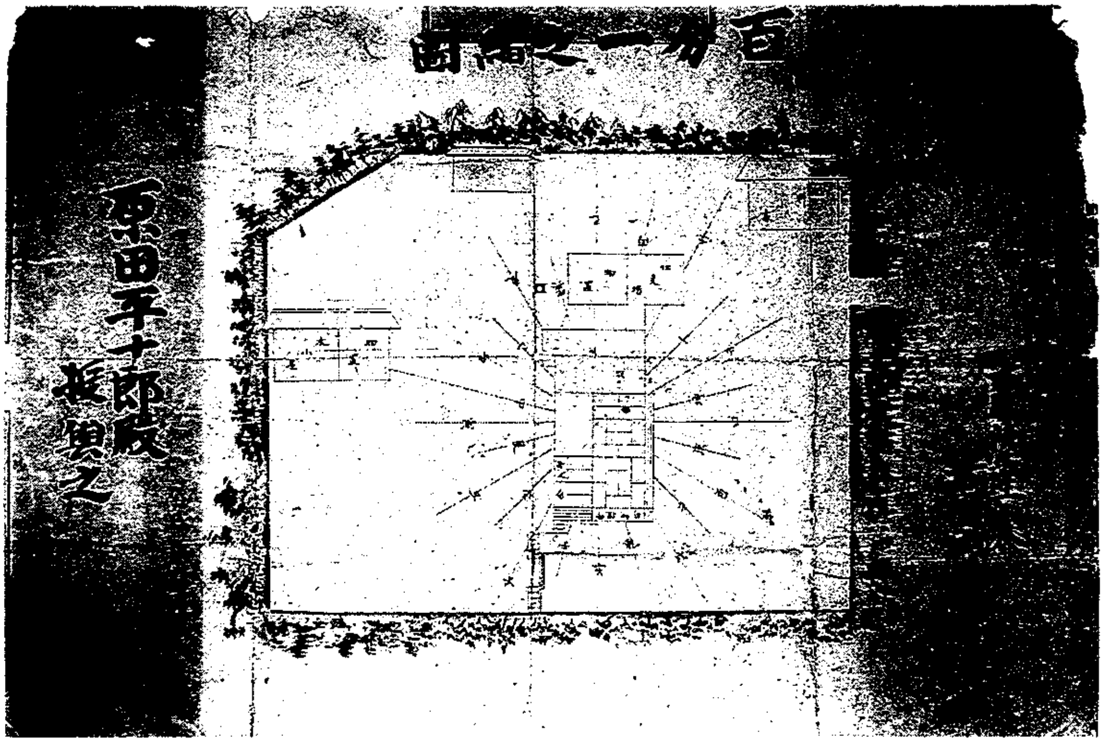

写真9　原田家家相図［喜多見］

に開くことは地相上忌むことで、この方角には屋敷神などを祀って地の霊を鎮めるようにします。また、主屋を建てるに際して、この方角は陰湿となることをきらうので、便所や竈（台所）、風呂などを造ることが避けられました。この外にも、地相や家相の対象となるものには、井戸や蔵、神棚、仏壇など数多くあり、それぞれ井戸は東南、蔵は西北、神棚は北、仏壇は西北に設けることを大吉としています。

ところで、こうした吉凶の判断も、生活環境や生活様式の違いから時代とともに変化しているものがあって、様々な説が生まれたり、全く逆の説があったりと、定説を求めることはできません。しかし、今でも根強く庶民の間で語り継がれているのは、地相や家相が単なる迷信からではなく、基本的には理論にかなった正しい知識や、過去の長い年月による経験から得た知識が基になっているからでしょう。

このように、農家の屋敷構えは自然環境に大きく左右されることから、これを守るために様々な工夫がなされてきました。今まで述べてきたことも、そのなかの１つというわけです。

残念ながら、現存する古民家を取り囲む屋敷配置や周辺環境は、宅地開発や区画整理等によって年々変化し、往時の姿がわかりにくくなっています。また、建築物そのものもより強固な構造となって、そうした屋敷構えを取らなくても大丈夫な技術にまで発達しているのです。

しかし、これらの調査を通じて、かつての家屋敷がいかに自然条件を配慮して建てられ、理にかなったものであったのかを窺い知ることができ、また、古民家をとりまく緑が、見えにくくなったかつての世田谷の自然を語ってくれるのです。そして、こうした先人たちの知恵や工夫によってできた自然に調和する屋敷構えこそが、本来あるべき姿なのかも知れません。

区文化財資料調査員　　高橋　　誠

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

Photo by Makoto Takahashi